年頭のごあいさつ

あけまして おめでとうございます

名寄市長　加藤剛士

昨年6月に東洋経済新報社が発表した「住みよさランキング」において、北海道内で名寄市が再び第1位となりました。これまでのまちづくりに対する評価であり、大変喜ばしいことです。あらためて郷土名寄市を開拓、創られた先人先輩はもちろん、市民一人ひとりのまちづくりへの情熱と努力に敬意と感謝を申し上げます。

昨年は、名寄駐屯地が6月に創立60周年の大きな節目を迎え、「自衛隊のまちなよろ」を再認識し、そして全国発信することができました。政府が、北海道自衛隊の重要性を認識し防衛計画に盛り込んだことは、名寄市にとって、安全安心はもちろんのこと地域振興の側面からも大きな意味があります。

4月にはJR名寄駅前に新たな名寄市の顔となる駅前交流プラザ「よろーな」がオープンし、市民はもちろん多くの皆様にご利用をいただき、駅前にも活気が戻ってきました。

一方で名寄市の南の玄関口である「道の駅」も相変わらずの活況です。その大きな特色が「もち」。ふうれん特産館の発信力に加え、名寄の「もち」が伊勢神宮の銘菓「赤福」の原料であり、日本一の生産量と品質を誇る産地であることが内外に確実に浸透してきています。「もち」は、ハレの日の節目には必ず登場する日本の文化そのものです。昨年から名寄市の一歳の子ども全員に、健康繁栄の願いを込めて「一升餅」を贈らせていただいておりますが、さらに「名寄のもち」を広く大きく発信して参ります。

ご当地グルメ「なよろ煮込みジンギスカン」は、北北海道の畜産拠点である名寄市立食肉センターを運営いただいているニチロ畜産のご協力を得て、こちらも全国展開が始まりました。また、ひまわりはもちろん、高品質のトマトジュース、特色ある冬野菜、ブルーベリー園、日本最北のワイナリー

計画、薬草振興など、名寄ならではの地域資源を活かした新たな取り組みが芽を出し始めているのも非常に楽しみです。

今春には名寄市立総合病院の精神科を中心とする新病棟がいよいよ完成し、屋上にヘリポートが設置されます。医療体制のさらなる充実と、いざという時の地域住民の安全安心がさらに高まることが期待されます。また、文化創造拠点として新たに生まれ変わる（仮称）市民ホールは、来春オープンに向けて関係団体をはじめ市民と対話を重ね準備を進めて参ります。さらには、名寄市立大学の児童学科４大化の検討が進められ、国が進める新たな子ども・子育て支援に関する施策や名寄市が策定する支援事業計画と照らし合わせながら、名寄市全体で地域の宝である子ども達を守り育てる仕組みづくりを進めて参ります。

さて、日本国内を見ると、昨年来からの日経平均株価は1・5倍になり、２０２０年東京オリンピック・パラリンピック招致決定は、国民に大きな希望を与えました。一方で国内人口は既に減少に転じ、特に地方の過疎化は深刻です。ＴＰＰや農政改革などの政策は効率重視であり、地域社会に明るい兆しはなかなか見えないような気もします。

しかし地球規模でみれば、人口は増加の一途、特にアジアの急速な発展は目覚ましいものがあります。さらに中国などの大気汚染、地球規模での天災、環境破壊、食料や水不足。こうした世界の動きを読むと、名寄市のような安心安全で自然豊かな地域の可能性は無限に広がります。

「ローカルにこだわり、グローバルに発想する」。名寄の持つ地域資源にさらに磨きをかけて持続可能な地域経営を目指すとともに、国内はもとより海外とも積極的に繋がり、名寄を発信することが今まさに必要なのではないか。「郷土愛」と「挑戦する気概」を持った　人財　を育むことが、地域のさらなる発展に繋がることを確信します。

東京都杉並区とのご縁から、台湾との交流がいよいよスタートし、まずは中学生、高校生の人財交流から始まります。あらゆる地域振興に大きな花を咲かせることを期待しています。

可能性を求めて、市民の幸せのために挑戦する姿勢を忘れず行動することを誓います。

本年が、皆様にとって輝かしい1年となりますよう、心からお祈り申し上げます。